

# 猫蓑通信

第 92号  
平成 25年  
(2013年)  
7月15日発行  
(年4回発行)



## 連句の座のマナー

青木秀樹

全国連句大会など多数の席で連句実作をする  
と、席によってその雰囲気はかなり異なること  
に気づかされる。私語をほとんど交わさずた  
黙々と句作に没頭している席がある一方、連衆  
がにこやかに会話を交わしながら一巻を巻き進  
めている席がある。

東明雅先生は「平成になってから、私は連句  
は世態人情諷交詩であると定義して、連衆の和  
を大切に、連衆心の復活を説き、手法としては、  
付けと転じを重視して、無心所着を否定してき  
ました。」(「猫蓑通信」第45号)と書かれて  
いるように、座を大切にするようにと説かれて  
きた。またそれに続けて「私は連句を、人と句  
数を争い自分の才学を誇るものではなく、あく  
までも人と和し、人を助けまた助けられて一巻  
を首尾する、そこに『連歌しの友は、従兄ほど  
親しきぞと申しはべり』と宗祇が言っている通  
りの連衆心が湧くものだと考えております(以  
下略)」と連衆の和を重視する考えを示されて

いました。

「猫蓑会式目の整理」を明雅先生が「猫蓑通信」  
第二十一号に発表されたのは平成七年十月で、  
「式目を新しく制定しようなんて大それた考え  
は毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理  
したまでである。」と猫蓑会会員の連句上達の  
ための方法であることを明記されている。当時、  
明雅先生も、初心者の指導に当たっておられた  
式田和子先生も、これは猫蓑会の中のもので、  
一人でも他流の人が入っている席では強制しな  
いようにと、くり返し言うておられた。世間  
には式目を持たない結社・グループが多く、式目  
が難しいことが連句普及を妨げるという反感を  
意識されたのであったと思う。

いま私は猫蓑会の連句の座が少しうるさいの  
ではないかと感じている。連衆が会話を交わし、  
なごやかなことは結構だと思うが、捌にクレー  
ムを付けることが多すぎるとはならないかと心配  
している。自他場に限らず、時候・時分・天象・  
水辺など『十七季』の「その他の主な式目」  
句数と去嫌」を片手にして捌に文句を付ける連  
衆が最近目立つ。単純なケアレミス指摘す  
るのと違い、式目の自分流の拡大解釈に基づく

## ●目次●

第百二十五回例会藤祭作品 二十韻十一巻	2
蕉風俳論抄『贈落柿舎去来書』(許六)より	5
執筆を終えて	6
吉田醉山	6
亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧二十韻一巻	6
奉納正式俳諧配役	7
第二十三回猫蓑同人会作品	7
全八巻のうち四巻	8
二条良基の序破急論	10
東明雅	10
温故知新10・古人の跡を求めず・芭蕉	11
事務局たより	12

指摘は座の雰囲気壊すことになる。すべから  
く式目解釈は捌に任せるべきものである。この  
ような平素の連句の座のマナー・作法が癖にな  
り、他派と交流する席でも自分の知識を押し付  
ける例があるとの指摘を外部の友人から聞き、  
嘆かわしく思っている。故宇咲冬男氏から「猫  
蓑の人は基本ができていと言われたように、  
式目は自分の向上のために使うべきものであつ  
て、他者に強要すべきものではないことを、明  
雅先生の教えに戻ってよく考えてほしい。  
連句の基本的な特性は他の文芸とは違い、連  
衆が協同して一つの作品を作ることである。先  
ず「連衆の和」が、楽しく時を使い、よりよい  
作品を創作するために欠かせないことを、会員  
のみなさんには再認識して欲しいと思う。

1・春光の座

二十韻「神の庭」 副島久美子 捌

藤棚をくぐれば清し神の庭 久美子  
 甲羅重ねる亀ののどらか 壘  
 夏近しギターの弦を替へるらん 香織  
 少年十五少し髭あり 常義  
 山の端の月を涼しく仰ぎ見て 郁子  
 遠野地ビールネット販売 織  
 映画館隣の席よりいい匂ひ 義  
 かそけく漏るる恋の携帯 同  
 豊漁の浜の賑ひ頼もしく 郁  
 第三セクター今も健在 織  
 ナオ 街中に寒行僧の鈴響き 郁  
 手焙り火鉢丸く囲んで 壘  
 翻る一反木綿ゆく広野 義  
 夜長嘆いて独り眠れず 壘  
 艶やかに月のダイアナ僕に笑む 同  
 風に抱擁秋桜中 義  
 ナウ 輩と居残り勉強懐しみ 織  
 テニス壁打ち血糖値下げ 郁  
 花のもと落成式の新社屋 織  
 湧くがごとくに百千鳥鳴く 郁

連衆 竹中壘 平林香織 生田日常義 東 郁子

2・春天の座

二十韻「藤房稚き」 上月淳子 捌

藤房のまだ稚ければ頭に触れず 淳子  
 笙の流るるのどらかな午後 泉子  
 春日傘垣の向かうを揺れ行きて 士郎  
 珈琲片手に少女語らふ 純子  
 蜘蛛の糸桂男と戯へたり 美奈子  
 宿したものに勝馬の名を 泉  
 子等巢だち何とはなしの半分こ 純  
 あれこれそれで会話成立 泉  
 独断でランボルギーニ買ったぞよ 士  
 英国流で髭の手入れを 奈  
 ナオ 聖堂のすが洩りの屋根修理中 泉  
 松葉蟹にてあげる祝杯 純  
 あぶな絵の絵師に一途の想ひあり 奈  
 胸の稲妻彼女貫け 士  
 ビルの窓それぞれ映す月の影 同  
 残業帰りがたぐる新蕎麦 奈  
 ナウ 政策は三本の矢の揃ひ踏み 士  
 けもの道とも夢の道とも 奈  
 海を見る野仏けふも花の笑み 泉  
 初虹の下眠る嬰兒 純

連衆 青木泉水 横井士郎 近藤純子 鈴木美奈子

3・春月の座

二十韻「丹の橋」 長坂節子 捌

丹の橋と藤房うつす水面かな 節子  
 亀の背に亀暮れかぬる頃 徹心  
 利茶して四方山話果てぬらん 遊民  
 少し焦がして作るクッキー 明子  
 野外劇オセロ登場月も出て 暁巳  
 匂ひ袋の袖交しつ 民  
 平筆と淡い絵の具で染めた恋 心  
 縁切りの寺パワースポット 明  
 ブーメラン遠くに飛んで鳥となる 民  
 密輸団には老いも若きも 巳  
 ナオ 帆柱に風吹きすすさびへたりこむ 民  
 又三郎も履いた襪かんじき 巳  
 筒井筒炬燵の中で足つつく 心  
 誰が為に鳴る鐘の遠のき 民  
 墨をする硯の海に浮ぶ月 心  
 新酒注ぎ合ふ古伊万里の盃 明  
 ナウ ばつたでも妖怪と見て騒ぐ孫 明  
 ムーミン谷は何事も無し 民  
 花一樹只それだけで故郷なり 同  
 うつらうつらと囁を聞く 巳

連衆 島村暁巳 内田遊民 野口明子 佐藤徹心

4・春星の座

二十韻「胸もとへ」 染谷佳之子 捌

胸もとへ藤の風来る神楽殿 佳之子  
 ぶんはり畳む春のストール ひろみ  
 若駒のまだ細つそりとつややかに 葵  
 広場で野球興じぬる子等 秀樹  
 火の番があくびしてをり月の町 あや  
 つごもり蕎麦を茹でる大釜 葵  
 石川と言へば五右衛門さんですか 樹  
 ボインがふたつ揺れてゐるのに や  
 騙し絵に秘めたる熱き恋のあり 葵  
 見てくれも良き仕出し弁当 み  
 ナオ買ったのは武者人形の安い方 や  
 汐高き浜勇むサーファー 樹  
 天下り渡りと上手く身を処して 之  
 満ちては欠ける月の律儀さ 葵  
 浮はついた噂もなく西鶴忌 樹  
 今年酒には女房の名を 葵  
 ナウ禁じられた遊びの曲のリフレイン み  
 物産展に偲ぶ故郷 樹  
 丘に立ち千年の花仰ぎをり み  
 最後の仔猫もらはれてゆく や

連衆 江津ひろみ 石川 葵 青木秀樹  
 中林あや

5・春霞の座

二十韻「茜添へたり」 鈴木千恵子 捌

一点の茜添へたり藤の浪 千恵子  
 春日傘差し高欄の下 アンズ  
 浅蜷汁磯の香を味はひて 醉山  
 連続ドラマ欠かさずに見る 敦子  
 スイッチバック田毎の月の明易し あかね  
 汗を飛ばして駆けてくる君 山  
 近松の女みために泣くもんか ア  
 誤字も脱字も熱き恋文 同  
 パドックで馬の尻見て馬券買ふ 敦  
 カメラ小僧の中に爺いも 山  
 ナオ 妙に静か雪娘来るころほひに ア  
 噛みつかれたるふいの鎌風 敦  
 映画村殺陣師の剣の冴えに冴え 山  
 町衆の旦那虫合せする 同  
 尺八の渺渺として大満月 ア  
 新酒を提げて降りる空港 ね  
 ナウ 電子機器我も我もと電源を 千  
 早口言葉きやりーばみゆばみゆ ア  
 手を合せ平和を祈る花万葉 山  
 鶯を聞く山間の里 ね

連衆 松島アンズ 吉田酔山 武井敦子  
 常盤あかね

6・春風の座

二十韻「晴れやかに」 松原弘子 捌

晴れやかに知己打ち揃ひ藤簾 弘子  
 五枚小鉤に遊ぶ春光 美恵  
 孕猫のそりのそりと歩み来て 了斎  
 白きボールの止まる石段 佐紀子  
 凍えつつ有明月をじっと見る 美恵子  
 外套掛けてくれた手を欲り 斎  
 神父様抱いてください懺悔あと 恵  
 埃が溜まる薄暗い隅 斎  
 無造作にピカソの鳩がころがって 恵  
 少年兵のゆがむ口許 佐  
 ナオ 夢に出る小豆苺のかき氷 子  
 水蟲やつと治りかけたか 恵  
 嫁に来てくれれば全て目を瞑る 斎  
 皺の数ほど恋の積りぬ 子  
 鍵盤の上流れゆく月の影 佐  
 優勝祝ひ菊の酒干す 弘  
 ナウ 高僧の背にひそりと放屁虫 恵  
 ケータイ電話つながらぬ村 佐  
 鬼のほか愛づる者なき山の花 斎  
 揚げる高さを競ふ風船 子

連衆 山口美恵 鈴木了斎 間佐紀子  
 武藤美恵子

平成二十五年四月二十三日  
 於 亀戸天神社

7・春風の座

二十韻「菅公に」

林 鐵男 捌

菅公に見せばや藤の波の色 鐵男  
 うらかな空執事呼ぶ声 忠史  
 到来の大粒浅利分け合つて 富子  
 傍らの猫ひよいと跳び退く 寿美子  
 水鉄砲月へ届けと思ひきり 史  
 おさげのリボン引つ張つてみる 寿  
 どうかしら彼の苗字に私の名 富  
 手紙の束は抽斗の中 寿  
 後任の駐在さんがやって来て 史  
 長の仕留めた猪鍋を食む 寿  
 ナオ 師範代評判が良い寒稽古 史  
 彼奴の自慢の筋肉に惚れ 富  
 夢かともクレオパトラとローマ風呂 史  
 戦場の跡建てる碑 寿  
 満月に誰か奏でる琵琶の音 同  
 ナウ 榎櫃のジュース喉に程よく 史  
 国賓のSPの胸赤い羽根 寿  
 養毛剤が売れるCM 富  
 花吹雪一輛電車通り抜け 寿  
 百人がかり百畳の風 史

連衆 根津忠史 名古屋富子 静寿美子

8・春霖の座

二十韻「紙垂の真白に」

西田一枝 捌

立礼や紙垂の真白に藤の風 一枝  
 亀鳴く池を渡る吟声 雅子  
 ことごと春挽糸を紡ぐらん 要子  
 店主振舞ふ故郷の菓子 豊美  
 月涼し渋谷の駅の変はりやう 雅  
 すれ違ひざま知つた香水 同  
 女装家の雇はれママが店を持つ 豊  
 同伴出勤ノルマ厳しく 要  
 ばけつ持ち廊下に出ると先生が 同  
 千手観音穏やかな笑み 雅  
 ナオ 漱石忌ごとりと屋根を渡る猫 豊  
 戦疼く雪しまく夜 要  
 囚はれの寵姫乱るるチマチヨゴリ 枝  
 温め酒酌み温めあふ肌 雅  
 部屋へ月斜交ひに射し込みて 豊  
 地震続きある地球冷まじ 要  
 ナウ ユーコンをライカ携へ特派員 豊  
 天然魚より佳いと平らぐ 要  
 乗り出さば手にも触れなん花筏 雅  
 土塁にのぼり遠足の子等 豊

連衆 武井雅子 山本要子 高橋豊美

9・春霜の座

二十韻「角髪清し」

高塚霞 捌

菅公の角髪清しや藤祭 霞  
 軟東風なでる脇の黒牛 健  
 団扇張る職人芸を受け継ぎて 未悠  
 バイクも軽く届くピザパイ 孝子  
 月さして波音ばかり囿ひ船 史  
 そろひの浴衣愛の砂文字 健  
 旅回り殺陣の素顔に惚れぬいて 孝  
 こんな筈ぢやあなかつたのよね 央  
 泣くことになるかも知れぬTPP 孝  
 観音様にたのむいろいろ 悠  
 ナオ ふぐ酒に添へ三つ星の味自慢 健  
 ブルーフォックスふはと脱がされ 孝  
 睦言は鼻にかかつたフランス語 悠  
 野育ちなればぬのこづちつけ 央  
 峠道のつべらぼうの出る月夜 悠  
 つりは要らぬとたぐる新蕎麦 孝  
 ナウ 人生のその処で躓きし 同  
 回転レシーブ世渡りの妙 央  
 花と咲き花と散るのもさだめなり 健  
 朝寝の夢は快晴の富士 悠

連衆 由井健 棚町未悠 坂本孝子  
 遠藤史子

10・春雪の座

二十韻「撫牛」

永田吉文 捌

撫でられて光る牛の背藤祭

吉文

弥生の苑に笙の流るる

文字

春シヨールそつと肩から外すらん

かりん

警備の人に身分証見せ

有子

川床の料理旨しと舌鼓

昭

簪揺らす晩涼の月

文

乱るるもあなた次第の私です

ん

嬬天下は一家安泰

昭

プードルが人の位を決めてゐる

文

カジノで負けて擦つた大金

同

内戦を生き抜く孤児のぼろ毛布

有

故郷の山雪も懐かし

ん

恋の矢の君を射るまでフェルマータ

同

御息所は精霊の舟

有

隈もなく真如の月の歌々と

昭

新酒に酔ひて即興の舞

ん

ナウ 高段の棋士歯も立たぬコンピュータ

文

がまん末に夢かなへたり

吉

映画館出でて花降る街の角

有

紙風船に残る折跡

ん

連衆 橘 文字 登坂かりん 佐々木有子

松原 昭

11・春雷の座

二十韻「藤の精」

金子泉美 捌

吟声や耳そばだつる藤の精

泉美

春裕着て昇る階

恭子

籠一杯とれたて栄螺かかへ来て

鄭和

玄関のベル鳴らす宅配

志世子

焼酎のグラスに月の揺れてをり

曜子

かうもりみたいな奴が愛しい

恭

二人して架空の都めざす径

世

ジャックの豆を濡らす悪童

和

交番に野球道具を置き忘れ

恭

目撃数多犯人の顔

泉

ナオ 新型のエコカー飛ばす息白し

曜

降っては積もる山間の雪

恭

合唱部あちらこちらで恋芽生え

世

命と彫つて俺に詰め寄り

和

初月になほついてゆく町はづれ

世

家々の軒ざらり干柿

曜

ナウ きらびやか時代祭の武者の列

和

病なんぞに負けぬ老優

恭

咲くも花散るも花散るの渦

和

逃水の原犬と駈け抜け

世

連衆 式田恭子 高山鄭和 秋山志世子

前田曜子

蕉風俳論抄 『贈落柿舎去来書』(許六)より

(前略)千歳不易・一時流行のふたつをもつて晋子(其角)が本性を論ぜらるゝはかねて其角が器をくわしくしりたまはざる故なり。

(中略)近年湖南・京師の門弟は、不易・流行の二つにまよひ、さび・しほりにくまされて、真の俳諧をとりうしなひたるといはんか。

(中略)不易・流行にくまざるといふは、予聞く。かつて趣向もうかまず、句づくりも出でざる以前に、不易の句をせん、流行の句をせんといへる作者、湖南の沙汰なり。翁在世のとき、予終に流行・不易をわけて案じたる事なし。句いで、師に呈す。よしはよし、あしきはあしきときはむる。

(中略)よしと申さるゝ句、不易・流行おのづからあらわるゝなり。滅後の今にいたつて猶しか也。かつて流行・不易を貴しとせず。よき句をするをもつて上手とも名人とももうすまじきや。(後略)

解題●芭蕉没後、其角と去来の間に「不易流行」をめぐる論争が起こる。そこに、どちらかといえば其角を擁護し、抽象論議を批判する形で割つて入つたのが許六の「贈落柿舎去来書」だ。論調がいかにも許六らしい。「蕉門十哲」の中でも最も新参の弟子だった許六は、このようにして芭蕉没後の蕉門を活性化する「トリックスター」のような役割を果たし続け、師の「跡をなぞる」風潮に抵抗し続けた。その個々の主張の当否とは別に、そうした姿勢、役割はもつと評価されているのではないだろうか。

(11ページ「温故知新」参照)

平成二十五年四月二十三日  
於 亀戸天神社

亀戸天神社神楽殿で正式俳諧

執筆を終えて

吉田酔山

第二十七回亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧興行は神楽殿で挙げる初めての試みとなった。節目の時に執筆を務めることになり緊張の上にもまた緊張。だが終わってみれば驚くほどの手ごたえがあった。来年も再来年もさらにさらに続けていくべきと確信。もともとっと充実させていくために貴重な初体験をもとに今後の課題を探ってみた。

●神楽殿

名前のごとくお神楽をするための建物である。能舞台の「鏡板」にあたる背後の壁には梅と月の絵が描かれ、前面と左右には壁がないオープンスペース。二十畳ほどの板張りの床なので、昨年の本殿での興行と同じく立礼になる。もともと備品は何もないが、床几、机など興行に必要なものはあらかじめ神社側で神社の備品を搬入してくれてあり、事後も撤去してくれる。執筆の文台を置く机、硯を置く机など、細部については、まだ今後の一層の工夫、検討の余地があると思われるが、ともあれ新しい試みへの亀戸天神社の懇切なご協力に感謝したい。

●興行

観客を前に正式俳諧を演じなければならぬ。何をしているか何を言っているかが分から



巻き終えた一巻を朗詠



執筆の大役を終え、菅公画像を背に

なければ、神楽殿でただ人が動いているだけとなる。知司、執筆は観客に伝わるよう所作を大きく行い、大声で発声することが大切。もちろん宗匠、副知司、配硯も同じ。立ち居振る舞い

第二十七回  
亀戸天神社藤祭正式俳諧

俳諧之連歌 二十韻

藤房の伸びて賑はふ天神社	秀樹
初虹かかる新しき塔	淳子
春炬燵永字八法習ふらん	郁子
グラスワインをそつとひと口	路子
夏の月想ふラヂオのハワイアン	常義
肌灼く砂で熱き抱擁	鄭和
恋模様ひとつひとつを継ぎ足して	恭子
レシビ通りに作るスイーツ	やすこ
家鳩の豆鉄砲を食った顔	良子
写楽探しは今もさかんに	暁巳
ナオ謎解けぬ推理小説山眠る	千恵子
マンモスの骨組み立てる冬	有子
帰さない柱時計の針戻し	明子
蓑虫のごと君に護られ	弘佳
緯度高きイーハトーヴに月の舟	香織
がんこ親父のはしゃぐ秋場所	敦子
ナウ豊饒と平均寿命とうに超え	雅子
清流絶ゆることのなき峪	了斎
小網もて掬ひし花の色淡く	孝子
羽織を畳む暮れかぬる頃	執筆

平成二十五年四月二十三日 首尾

亀戸天神社に於いて興行

は座敷のようにはいかない。観客の期待に応えるにはかなりの体力と気力を必要とする。還暦過ぎの身には呆然とするほどの疲労が残った。芭蕉忌と藤祭はそれぞれ別の配役にするなど一考の余地があるのではないか。

### ●配置

座敷の場合と同じ並び方では執筆や花司、宗匠の所作が客席からよく見えない。役割も分からない。解説者の的確な解説で内容は理解できたとと思うが実際の動きがよく見えず観客に不満が残ったのでは。狭いスペースでは動きも限られる。連衆の位置、配硯の位置など、どこからも全体が見えやすくするために配置を根本的に変更する必要がある。とはいえ正式俳諧の伝統の精神をしっかりと踏まえておくのは当然のことである。

### ●椅子

座敷の正座と板の間の椅子では所作が全く異なってくる。立礼の挨拶ひとつにしても、いろんなやりかたがあるらしい。お辞儀を立ったままでするのか床に座つてするのか、特に女性は悩むところである。連衆は執筆の前でどんな格好をして待てばよいのか、硯や扇子をどこにどのように置けばよいのか、歌膝もなく執筆は懐紙をどう持てばよいのか、などなど意外なところで苦労がある。諸々細かなことまで神楽殿バージョンとして決めておく必要がある。

### ●天候

事前の稽古の日は大雨。寒風の中冷たい板張りの上では手が凍え俳諧どころではなかった。

雨や強風にどう対処するか。ひどい風雨の時は当然中止となろう。ほどほどの天候の時が難しい。晴れても風があると懐紙や短冊がひらひらし、執筆は所作が滑らかにできない。水引も気になる。女性も髪が乱れてお気の毒。雨の時は傘をささなければならず見物客も少なくなる。悪天候を想定し神楽殿と座敷のダブルスタンバイをせざるを得ないのではないか。

### ●晴舞台

観客の見上げる中、多くの視線を浴びての所作は、高揚感がある。一挙手一投足をじっと見つめる観客から「気」が津波のように押し寄せてくる。それを満身で押し返す。尺八演奏会の張りつめた状態に似ている。ここでは誰もが演者。まさに大舞台である。しからば舞台としての体裁を整える必要がある。古典芸能は古典にふさわしい形をとる。古式豊かな正式俳諧となれば連衆が洋装では様にならない。正装の必要はないがせめて和装にしたい。

### ●恒例

藤祭は亀戸天神の一大イベントである。藤を求めての賑わい。絶好の機会を捉え参詣の善男善女に俳諧興行を見て貰い連句に興味を持ってもらう。強烈に広く連句をアピールしていくのにこれほどの場はあるまい。天神社神楽殿興行は猫袷会の重要な行事の一つになっていくと思う。またなるべきであろう。「亀戸天神といえど俳諧興行」「俳諧興行と言えど亀戸天神」ということが巷間に流布されるべく、さらなる隆盛を期待したい。

## 亀戸天神社藤祭正式俳諧配役

宗匠	坂本 孝子
脇宗匠	上月 淳子
執筆	吉田 酔山
知司	高山 鄭和
副知司	武井 雅子
座配	野口 明子
花司	佐々木有子
配硯	平林 香織
老同	武井 敦子
長	青木 秀樹
解説	式田 恭子



儀式に加わっていただいた神職とともに記念撮影

1・草枕の座

歌仙「山髯」

橋 文子 捌

父の日や白髯の師を懐かしむ 文子  
夏帽を振る写真卓上 千恵子  
小公園猫の出入りきりもなし 節子  
ラジオ体操皆勤の子も 霞  
書を閉じて頬杖で見ると月の窓 士郎  
焼松茸にうごめかす鼻 千  
そぞろ寒ピエロくると宙返り 節  
セーヌを西へ下るクルーズ 霞  
大海原鯨二頭が寄り添って 士  
はかなきが良しゆきずりの恋 千  
油彩画に描きとどめるファミフアタル 文  
ブラディーメリーカクテルの名に 士  
赤色灯点し保線の工事中 節  
祭半纏月に笛吹く 同  
人類以前古生代より御器嘯 千  
独裁国は飛道具持つ 士  
望郷の眼裏いつも花の降る 千  
山里ゆけば突然に雉 霞  
ナオ 遠足のひとりしゃがめば皆しゃがみ 節  
コンビニ前はけふも溜り場 千  
収集車夜明けの街を音高く 霞  
起きて又寝て夢の続きを 士  
通販で便利な暮し買ひ求め 千

あなた好みと付けた折紙 霞  
風邪声で言ひ寄られては逃げきれず 士  
寒紅拭ひ道ならぬ事 霞  
水垢離の若き僧侶の肌の透け 千  
一反木綿わりと役立つ 同  
後の月石置きの屋根照らしをり 霞  
ノクターン聴く爽涼の頃 節  
ナウ 村芝居大見得を切る心地良さ 士  
はい深呼吸両手ひろげて 霞  
ツイッターリツイートされ延々と 節  
飾り木靴とデルフトの皿 千  
花の旅那美さん所縁<sup>ゆかり</sup>の出湯宿<sup>※</sup> 文  
春のみかんを急ぎ収穫 霞

連衆 鈴木千恵子 長坂節子 高塚 霞  
横井士郎 ※那美さん(草枕)所縁の宿熊本小天温泉

4・三四郎の座  
歌仙「切絵のやうに」 式田恭子 捌

紫陽花の切絵のやうに咲きにけり 恭子  
夏燕飛ぶ苑の一隅 郁子  
区民バス客三人はそれぞれに 鄭和  
返し忘れた図書館の本 弘子  
月今宵名曲喫茶検索す 遊民  
秋の袷の染めを褒められ アンズ  
松茸飯香の満ちてをり玉の庭 弘  
中ほどの彼なんとハンサム 郁  
生まれつき世話焼きの癪抜けきれず 和

影武者の身で姫にお仕へ 阿  
舳斗雲ちよつと地球をひと巡り 民  
小さな咳を聞いてゐる月 阿  
街角にホットワインを立ち飲みし 同  
粹なポリスはマイク片手に 民  
健康に自転車がよく勧められ 弘  
あれもこれもと通販で買ふ 民  
花の旅見事三春の灌桜 郁  
出開帳には孫と連れ立ち 和  
ナオ 金盞溢るるばかり蛸蚪の紐 弘  
手のつけられぬミケの悪戯 和  
定年後自由生活夢にみて 民  
熱帯雨林に仰ぐ青空 阿  
水着など要らぬと海に引き込まれ 和  
何処どこまでもついて行きます 郁  
犬だつて寂しくなれば毛が抜ける 民  
五輪招致は又も躓き 弘  
裏路に美声響かせ焼薯屋 同  
サザエ一家の像に税金 阿  
新しきゲームに並ぶ月の下 弘  
べつたら市をそぞろ歩きぬ 民  
ナウ 秋収済ませ静まる故郷の村 郁  
子宝といふ宝大事に 阿  
チームワーク個々の力があつてこそ 弘  
出雲の町は遷宮で湧く 和  
柏手を打つて戻れば花の山 恭  
日々倅せと思ふ麗日 民

連衆 東 郁子 高山鄭和 松原弘子  
内田遊民 松島アンズ



6・にぎりえの座

歌仙「梅雨入」

染谷佳之子 捌

研ぎ上げて刃物の匂ふ梅雨入かな 佳之子

青鱈捌く厚き蛆 路子

学長は口髭ぴんと跳ねるらん 良子

千円札にどつと収まる 要子

覗き込む井戸にゆらゆら映る月 醉山

小振りの壺にりんどうを挿す 泉子

ウ 突然に静寂を破る賜高音 良

演出めぐる評価あれこれ 要

田舎より恋ありさうな街に来て 山

からめとられたハニートラップ 泉

実体の無い株の値に一憂し 良

南の国に豪華別荘 山

反転の地球を越えて冬の月 泉

颯の道ぞ俺と貴様は 山

指揮棒の大きくふられコンサート 要

客席はいま海の沈黙 泉

特攻の戦史は哀し花の降る 路

人影消ゆる陽炎の中 要

ナオ 忘れもの探す半日のどらかに 路

百号の絵の異彩放ちて 良

駅前の旅館ホテルに姿変へ 山

厄除け願ふ吉兆の菓子 之

短夜の天目茶碗掌にうけて 要

猿面冠者の好む生娘 良

酔はなけりや惚れたと言へぬマツチョマン 山

入婿来たと美容師の笑む 同

あれも夢これも夢なり自伝書く 路

庭の雀の拾ふパン屑 良

望の月スカイツリーは粋き雅び 要

修道士等の醸す葡萄酒 良

ナウ 壁飾り野山の錦織り出して 泉

ひえつき節に偲ぶ故郷 路

お帰りのチャイム合図に下校の子 泉

飛天の遊ぶ水煙の中 良

老大樹花は今年も満開に 之

家苞にするミニチュアの風 要

連衆 倉本路子 本屋良子 山本要子

吉田酔山 青木泉子

8・千羽鶴の座

歌仙「十葉」

間瀬美美 捌

十葉の狭庭溢るる白さかな 芙美

餌をねだりつつ育つ子燕 淳子

覚えたて自転車漕ぐ声高に 央子

スケッチブックいつも懐 敦子

窯出しを楽しみにして月に酌む 秀樹

秋風に見る凡作もよし 碧

ウ 猪の横切つてゆく登山道 央

弁財天の祠古りたる 碧

契りきな君の瞳に射抜かれて 央

あなたのポチになりたいと言ふ 樹

お巡りさん渋谷駅前取仕切り 淳

五輪招致の旗の翩翻 敦

乱高下寒き株価に月の影 碧

柳葉魚の素揚げ藻塩少々 敦

長電話埒なき話続きをり 淳

煉瓦造りの胡同の町 芙

背を向けて花に吸はれて逝きしひと 央

指を離せば空に風船 淳

ナオ おぼろ夜の明くれば窓に鳥の声 碧

みんなで決めるカーテンの柄 淳

サザエさん齡をとらぬに驚いて 樹

人間国宝つぎつぎに消え 同

都市喧噪ビルの間の油蟬 敦

一本箸で心太喰ひ 淳

半年で鍵を預ける仲になり 同

プロレス好きのじやれ合つてゐる 樹

戦中派捨てられなくてゴミの山 央

写葉の目玉どこを見つめて 敦

稜線の月を映せる湖静か 淳

結核病棟けふもうそ寒 樹

ナウ 欧州にも墓塚前に祈る民 碧

スマホのアプリながなやかにやら 敦

厨辺に笛吹ケトル呼びてをり 淳

春の炬燵はいまだそのまま 央

花むしろお手玉遊びきりもなく 芙

下校の子らを追ふやうに蝶 樹

連衆 上月淳子 遠藤央子 武井敦子

青木秀樹 松本碧

平成二十五年八月十六日  
新宿ワシントンホテル 新館

## 二条良基の序破急論

東明雅

昭和四十二(一九六五)年三月発行

『山樸』第八号より転載



二条良基(一一三〇—一三八八)は、連歌が芸術として確立する基礎を作った人である。即ち、連歌の最初の作品集として「菟玖波集」を編纂したこと、まぢまぢだった式目を整理して「応安新式」を定めたこと、「筑波問答」以下多くの連歌論書を著して時人を指導したこと、彼のこの三つの業績をもとにして、連歌をはじめて和歌と対等の芸術たる地位を占めることができるようになったのである。

それ故に、良基の考え方は、後の連歌は勿論、連歌から流れ出た俳諧の理念や形式にも大きな影響を与えている。と言うよりも、彼の著書以前に、連歌について論じたものとしては断片的な「八雲御抄」の説ぐらいしかなないのであるから、連歌・俳諧の理念や形式に関する論を遡れば、その源流としては良基の説以外にゆく可能性がないと言った方が、より妥当かも知れない。

事実、良基の連歌論は、今日も尚問題とすべきものを多く含んでいる。今回はそのうち、序破急の論について考察してみたい。

序破急は元来、舞楽など古代東洋音楽の表現形式の原理となるものであるが、これを取り入れて連歌

一卷の進行過程の原理としたのは、良基の「筑波問答」にあるのが初見で、まず、その良基の説を現代文に直して示せば次の通りである。

『普通の百韻連歌においても、一の懐紙の面はしとやかな連歌をしなければならぬ。てにをは(助詞、助動詞の類)も軽々しいものを使つてはならぬ。二の懐紙からは浮き浮きとした賑やかな句を作り、三・四の懐紙はことにすぐれた面白味のあるようにするのである。音楽にある序・破・急というものを連歌にあてはめるなら、一の懐紙は序、二の懐紙は破、三四の懐紙は急にあたるだろう。』(筆者註——百韻の連歌は折紙四枚を重ね用いて句を記す。折紙は懐紙を横二に折り、折目を下にして、その表と裏とに句を記した。一の懐紙の表に八句、その裏以下、四の懐紙の表までは各十四句、四の懐紙の裏に八句したためるのがきまりでこれは俳諧の百韻の場合も同じである。)

これが連歌、俳諧の世界、ひいては文芸の世界に取り入れられた序破急論の最初の姿であるが、この良基の考えた序破急論の特色は、序・破・急の急の部分か他の二倍の分量を持ち、またここに一卷の興味の中心がおかれていることで、この点、今日我々の序破急意識と相当喰いちがっている。

どうして良基の説がそのまま今日まで残ることができるか、修正されねばならなかったか。良基の説のままたと一卷の構成から見ると急の部分の比重が大きすぎることが、まず考えられる。同じく音楽の序破急を援用した能楽論において、世阿弥は次のように言う。

「急が久しくは急ならず。能は破にて久しかるべし。破にて色々を尽くして、急はいかにも唯一きりなるべし」(花鏡)

世阿弥によれば、破とは、序を破り細やかに数々の技巧をこらし、様々の風情を見せるところである。そして急とは、その破の気分を極限までつきつめた最終段階として、烈しい動作をたたみかけ、テンポの早い舞を見せ、人を驚かすような風体を示すべきところであると言う。破・急をこのように解する限り、破は人をゆつくり楽しませ、急ははげしく人を驚かすものとして、破にて久しく、急はただ一きりなるべしという理由も甚だ明らかである。

勿論、能楽論と連歌論とを全く同じものとして取り扱うことは危険である。だが同じ芸術論として、それらの根底を貫くものには共通するところがある。いかにしても良基の考えた急の分量は大きすぎたようだ。ここで間延びする恐れが大きい。それで、このような能楽論からの影響もあつてか、後に良基の説は修正されて、発句から十句まで(面十句)を序、十一句目から二・三の懐紙全部をふくめたものが破、四の懐紙が急ということになった。

俳諧においても、この修正された序破急の原理が受けつがれた。尤も芭蕉の時代あたりから百韻の俳諧はすたれ、三十六句の歌仙俳諧が専ら行われるようになる。これも百韻に準じて表六句が序、初裏(十二句)と名残の表(十二句)計二十四句が破、名残の裏(六句)が急ということになり、これが今日に及んでいるのである。

次に、良基の序破急論の第二の特色である急の部分に一卷の興味の中心を置くということも、今日では否定され、修正されている。

与えられた紙幅が尽きたので、それについての詳細は後日を期したいが、ただ、それを追求することがすぐさま連歌、俳諧の本質を追究することになるということだけは言えるであらう。

# 温故知新

10・古人の跡を求めず

● 古人の求めたる所を求めよ  
芭蕉「柴門ノ辞」元禄六（一六九三）年

去年こぞの秋、かりそめに面をあはせ、今年五月の初、深切に別れを惜しむ。其の別れにのぞみて、ひとひ草扉をたたいて終日閑談をなす。その器、画を好み、風雅を愛す。予こころみに問ふ事有。「画は何の為好むや」、「風雅の為好む」といへり。「風雅は何の為愛すや」、「画の為愛す」といへり。其の学ぶこと二にして、用をなす事一なり。まことや「君子は多能を恥づ」といへれば、品二つにして用一なる事、感すべきにや。画はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が画は精神微に入り、筆端妙をふるふ。其の幽遠なる所、予が見る所にあらず。予が風雅は夏炉冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。ただ釈阿・西行の言葉のみ、かりそめに云散らされしあだなるたはぶれごと、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかかせ給ひしものにも「これらは歌に実ありてしかも悲しびをそふる」とのたまひ侍しとかや。さればこの御ことばを力として、其の細き一筋をたどりうしなふ事なけれ。猶「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」と南山大師の筆の道にも見えたり。「風雅も又これに同じ」と云ひて、燈をかかげて柴門の外に送りてわかるのみ。  
元禄六孟夏末 風羅坊芭蕉

・現代語訳

去年の秋、たまたま許六と知り合ったのだが、今年五月の初めには早くも痛切に別れを惜しむことに

なつてしまった。別れを前に私の草庵を訪ねてきたので、ともに閑談して一日を過ごしたものだ。その人柄は絵をよくし、風雅（俳諧）を愛する。こころみに「なぜ絵を好むのか」と尋ねると「俳諧のためです」と言い、「ではなぜ俳諧を愛するのか」と問えば「絵のためです」と答える。二つのことを学んでいるようでいて、実は一つの働きが二つに分かれているだけなのだ。「あまり多能多才なのは君子らしくなく、むしろ恥だ」などというが、表現が二通りでも元にある働きは一つだとは素晴らしいことだ。許六を私の絵の師として絵はこれに学び、俳諧は私の弟子としてこれに教えた。けれど師の絵はその精神が微に入り、筆致は妙に入り、その幽遠の境地は私などの論評出来る域を超えている。ところが、私の俳諧はと言えば、大方の好み、風潮と合わず、まるで夏の火鉢、冬の扇子のように役立たずだ。ただ、藤原俊成と西行法師の言葉、歌は、即興の冗談に言い散らしたようなものでさえ、趣深いものを多く含んでいる。後鳥羽上皇も「俊成・西行の歌には深い実がこもり、しかも哀しみが添えられている」とお書きになつておられる。だから、このお言葉をたよりに、実と哀しみという、細い一筋を決して見失わないように辿つて行きなさい。そしてもう一つ、「古人のしたことの結果を真似るのではなく、古人がめざしたところを自分も同じようにめざしなさい」と、弘法大師も書の道について言っている。俳諧もこれと同じことだよ、と言いつながら、灯火をかかげて柴の戸から送り出し、別れたことだった。

解題●「柴門ノ辞」は「許六離別の詞」とも呼ばれる。短文ながら、「予が風雅は夏炉冬扇のごとし」「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」など、人口に膾炙した語句を含み、蕉風俳諧の真髓を凝縮した名文だ。

主君の参勤交代に従つて江戸に来た森川許六が、江戸勤番を終えてまた去つて行く。二人が対面しての交流は、元禄五年の秋から六年（芭蕉の死の前年）の夏にかけての一年にも満たない間だけで、この後二人が再び相まみえることはない。おそらくはそのことを予感していた芭蕉の、最晩年に得た鍾愛の弟子への真情が行間から滲む。この文章自体がまさに実と哀しみの表現だ。  
許六といえは論争好きで自信過剰で、やや偏つた見解を強硬に主張する人、といった印象を持たれがちだ。  
しかし、六種の技法に通じているという意味で「許六」という俳号をみずから与えた許六の資質を、芭蕉が高く評価していたことはこの一文からも伝わってくる。  
自分の跡だけをなぞれ、自分の教えを一字一句変えるな、というようなことを師が弟子に求めることがあるとすれば、それはその弟子を、弟子としてまったく信頼していないということの表明に違いない。それと逆のことを語るこの一文は、弟子としての許六への芭蕉の信頼の証しだとも言えるだろう。それはまた、絶えざる自己変革を続けてきた芭蕉自身の姿勢の再確認でもある。  
チベットには「師は、自分を超越する弟子を持つてはじめて、本当に師と呼ばれる資格を得る」という意味の諺がある。まことに、北村季吟は弟子である変革者芭蕉によつてはじめて、真に師たりえた。芭蕉の直接の弟子にも、そしてその後ついに現在に至るまでも、芭蕉を超える弟子は出なかつたかもしれない。しかしこれらに後世に影響を与えた人は、やはり師と呼ばれる資格があるだろう。そして、ひたすら師風を継承し、師の跡を求めただけの人が多かつたように思える直門の弟子のなかで、師の信頼に応え、師の求めたところを求めてもがき続けた人の一人が許六だったのでないだろうか。  
もし、歴代の連歌師、俳諧師が常に古人の跡だけを求めていたら、出発点である二条良基の論は、今日に至るまで、まったくそのままの形で通用してはいたに違いない（右ページ参照）。では、師の跡をなぞるのではなく、師の求めたところを求めるにはどうすればいいのだろうか。私達も真剣にそれを考え、模索することを通して、豊かな師恩に報いて行かねばならない。（斎）

●第百二十五回例会（亀戸天神社藤祭興行）が開催されました

四月二十三日（火曜日）、亀戸天神社にて、藤祭俳諧興行が開催されました。正午より亀戸天神社神楽殿にて公開の正式俳諧を興行し、引き続き社務所内の会場にて、十一卓に分かれて二十韻の実作を行いました。当日の正式俳諧二十韻一巻はP6、実作会二十韻十一巻はP2～5に掲載されています。

●第二十三回猫養同人会総会が開催されました

六月十六日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて、第二十三回猫養同人会総会が開催されました。十一時からの議事後、八卓に分かれて歌仙を興行しました。当日巻かれた歌仙八巻のうち四巻は今号のP8、9に掲載されています。残り四巻は次号（第九三号）に掲載予定です。

●今後の予定

●第百二十六回例会

平成二十五年年度総会・歌仙実作

七月十七日（水曜日）

十一時～十七時（受付十時半より）

於 江東区芭蕉記念館

●芭蕉忌正式俳諧稽古

九月十八日（水曜日）

於 江東区芭蕉記念館

●第百二十七回例会



芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌脇起源心実作  
十月十六日（水曜日）  
於 江東区芭蕉記念館

●新会員

・斉藤久美 神奈川県川崎市在住

●住所変更

・間佐紀子 横浜市保土ヶ谷区へ転居

・原田千町 東京都中央区へ転居

●猫養基金にご協力ありがとうございます

・山寺たつみ様 平成二十五年五月 五千元

・金久保淑子様 平成二十五年六月 三千元

・横山わこ様 平成二十五年六月 三千元

・匿名 平成二十五年六月 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●出版

・四宮連句会作品集第十巻「夏袴」五月十六日刊

非売品 お問い合わせは式田恭子まで。

●訃報

・会員の中野昌子様が、五月二日、ご逝去されました。謹んでご冥福を祈ります。

●猫養作品集の追加注文について

作品集第二十二巻を七月中に発行する予定です。出稿した会員には各一冊が配送されますが、部数の追加を希望する方、また出稿しなかったけれど購入を希望するという方は、「猫養通信」今号に同封の葉書に必要事項を記入し、七月二十四日まで

で返送して下さい。価格は一冊につき二千元です。支払いについては、追加分の配送の際に、郵便局の払込票を同封します。会員外の方で購入をご希望の方は、猫養会までご連絡下さい。価格支払い方法とも、会員分と同様です。

●各種募吟にふるってご応募ください

・平成二十五年年度岐阜県文芸祭連句部門

九月三十日締切 形式：短歌行 一人一編

問い合わせ先：岐阜県教育文化財団文芸祭担当

電話・058-277-1139

詳細は猫養会内の各実作会などお問い合わせ下さい。また猫養会オフィシャルサイトの「サイトマップ」ページ「関連リンク」に「代表的な連句募吟」として各募吟サイトへのリンクを設置しています。応募用紙ファイルをダウンロードし、記入したファイルをメール添付で送ることにより応募できる募吟もあります。

●猫養会オフィシャルサイト

<http://www.neko-mino.org>

季刊 『猫養通信』第九十二号

平成二十五年七月十五日発行

猫養会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社